

たかふし  
高節遺跡 1

—高節遺跡第2次調査報告—

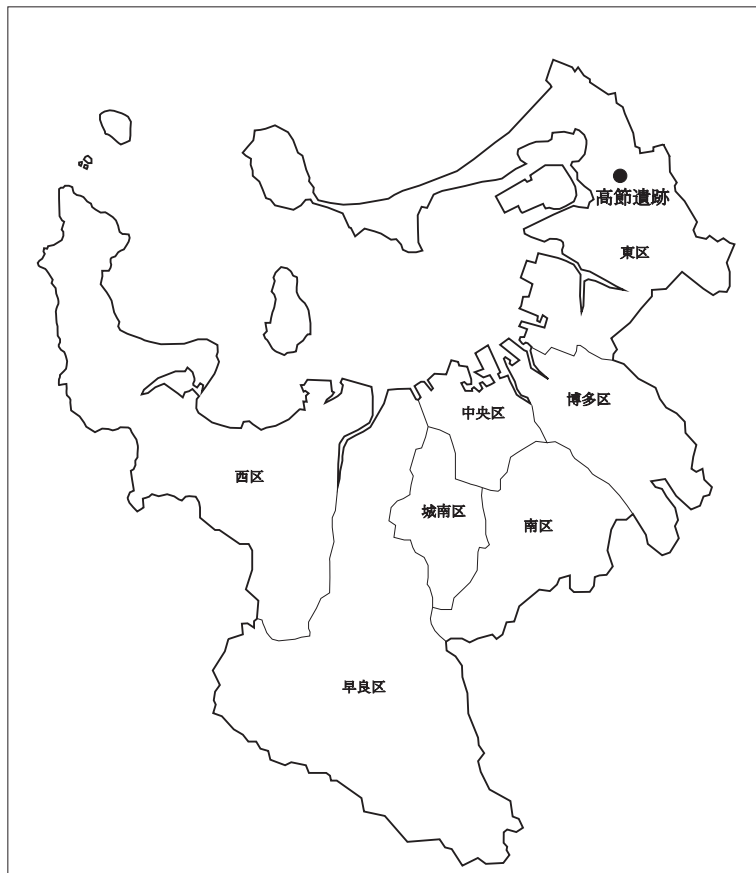


2021  
福岡市教育委員会



たかふし  
高節遺跡 1

—高節遺跡第2次調査報告—



遺跡略号 TKF-2

調査番号 1910

2021  
福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面して広がる福岡市は、大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古くから大陸・半島との窓口として発展し、市内には数多くの遺跡(埋蔵文化財)が存在します。その一方で都市の発展に伴う開発行為により、やむを得ず失われる遺跡が数多くあり、これらを後世に伝えることは、本市の重要な責務であります。本市教育委員会では、失われる遺跡については事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めています。

本書は、福岡市東区下原4丁目907-6地内における宅地造成に伴い実施した高節遺跡第2次発掘調査について報告するものです。

今回の調査では古墳3基を検出するとともに、古墳墳丘部および石室内から須恵器・土師器等の遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業主様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から本書の作成に至るまで、ご理解とご協力を賜りました。ここに心からの感謝を表します。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

## 例言・凡例

1 本書は、福岡市東区下原 4 丁目 9 0 7 - 6 地内における宅地造成事業に先だって、福岡市教育委員会が平成 31 年度に発掘調査を実施した高節遺跡第 2 次調査の報告書である。  
発掘調査及び整理報告書作成は、民間受託事業および国庫補助事業として実施した。

2 本書における作業分担は以下の通りである。

遺構実測	中園将祥
遺物実測	中園・久富美智子
拓本	中間千衣子
トレース	中園
遺構写真・遺物写真撮影	中園
執筆	中園
編集	中園

3 本書で使用した方位は座標北であり、座標は世界測地系を用いている。

4 遺跡略号は TKF-2(高節遺跡第 2 次調査)・遺構略号は SO(古墳)とするが、本文では遺構略号は使わずに「1 号墳石室」「2 号墳羨道」などと記載する。また出土遺物へは「TKF2 SO-01 石室」「TKF2 SO-02 羨道」と注記を施した。

5 本書に関わる図面・遺物・写真等の管理は、全て福岡市埋蔵文化財センターで行う予定である。

6 本書で報告する調査の基本情報は下表の通りである。

遺跡名	高節遺跡	調査回数	2 次	遺跡略号	TKF-2
調査番号	1910	分布地図幅名	唐ノ原 16	遺跡登録番号	2741
事業対象面積	902.00㎡	調査対象面積	500.00㎡	調査面積	549.00㎡
調査期間	平成 31 年 4 月 22 日～令和元年 9 月 10 日			事前審査番号	30-2-723
調査地	福岡市東区下原 4 丁目 9 0 7 - 6				

## 本文目次

第 I 章	はじめに	1
	(1) 調査に至る経緯	1
	(2) 調査の組織	1
第 II 章	遺跡の位置と環境	2
	(1) 遺跡の位置と立地	2
	(2) 遺跡の歴史的、地理的環境	2
第 III 章	発掘調査の記録	5
	(1) 調査の概要	5
	(2) 遺構と遺物	11
	1) 1号墳	11
	2) 2号墳	17
	3) 3号墳	20
	4) 小石室	21
	(3) まとめ	22

## 挿図目次

第 1 図	調査地周辺遺跡分布図 (S=1/25000)	3
第 2 図	高節遺跡第 2 次調査地点位置図 (S=1/1000)	4
第 3 図	遺構配置図 (S=1/200)	6
第 4 図	調査区配置図 (S=1/1000)	6
第 5 図	遺物出土位置図 (S=1/400)	6
第 6 図	トレンチ断面図その 1 (S=1/100)	7
第 7 図	トレンチ断面図その 2 (S=1/100)	9
第 8 図	1号墳 (S=1/100)	12
第 9 図	1号墳流土 1 A 遺物 (S=1/4・1/6)	13
第 10 図	1号墳流土 1 B・1 C 遺物 (S=1/4)	14
第 11 図	1号墳石室遺物 (S=1/4)	14
第 12 図	1号墳墓道 1・2 遺物 (S=1/4)	15
第 13 図	2号墳 (S=1/80)	16
第 14 図	2号墳周溝・前庭部・羨道 1 遺物 (S=1/4)	18

第 15 図	2 号墳羨道 2 遺物 (S=1/4) .....	19
第 16 図	3 号墳 (S=1/100・1/200) .....	20
第 17 図	小石室 (S=1/60) .....	20
第 18 図	小石室遺物 (S=1/4) .....	21
第 19 図	1～3 号墳 (S=1/500) .....	22
第 20 図	1～2 号墳石室・小石室 (S=1/100) .....	23

## 写真目次

遺構写真 1 .....	24
遺構写真 2 .....	25
遺構写真 3 .....	26
遺物写真 1 .....	27
遺物写真 2 .....	28
遺物写真 3 .....	29



# 第 I 章 はじめに

## (1) 調査に至る経緯

平成 30(2018) 年 10 月 26 日、福岡市東区下原 4 丁目 9 0 7 - 6 地内における宅地造成について、福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係に、照会文書が提出された(事前審査番号 30-2-723)。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である高節遺跡及び高節古墳群に含まれており、平成 14(2002) 年の試掘調査にて古墳 3 基の存在が確認され、また平成 30(2018) 年の試掘調査では古墳以外の遺構は確認されず、事前に埋蔵文化財の記録保存のために古墳の発掘調査が必要であるとの結論に達した。この成果を受けて、埋蔵文化財課では申請者と協議を行い、申請地面積 902㎡のうち古墳の破損が考えられる 500㎡について、発掘調査を行い、記録保存を図る事で協議が成立した。

発掘調査は、平成 31(2019) 年 4 月 22 日～令和元(2019) 年 9 月 10 日に行い、調査面積 549㎡、遺物はコンテナボックス約 10 箱分が出土している。資料整理及び報告書作成は、翌令和 2(2020) 年度に行う事となった。

なお現地での発掘調査にあたっては、調査委託者を始めとする関係者の皆さまには多大なご理解と協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

## (2) 調査の組織

調査を実施した平成 31(2019) 年度、および資料整理・報告を実施した令和 2(2020) 年度の組織は以下の通りである。

調査委託：	個人		
調査主体：	福岡市教育委員会		
調査総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人 (31 年度)
		調査第 1 係長	吉武学 (31 年度)
整理報告総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人 (2 年度)
		調査第 1 係長	吉武学 (2 年度)
調査庶務：	経済観光文化局文化財活用部文化財活用課	管理調整係	松原加奈枝 (31 年度)
整理報告庶務：	経済観光文化局文化財活用部文化財活用課	管理調整係	松原加奈枝 (2 年度)
事前審査：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎 (31 年度)
		事前審査係長	本田浩二郎 (2 年度)
		事前審査係	田上勇一郎 (31 年度)
		事前審査係	田上勇一郎 (2 年度)
調査担当：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課		中園将祥 (31 年度)
整理報告担当：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課		中園将祥 (2 年度)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### (1) 遺跡の位置と立地

福岡平野とは、東を三郡山地、南を脊振山地によって囲まれ、北は玄界灘に向かって開口する博多湾に面した地の総称であり、多々良川等によって形成された糟屋平野、御笠川・那珂川流域に広がる狭義の福岡平野、室見川流域に広がる早良平野に細分できる。

高節遺跡は、JR 九産大前駅から東方に約 800 m、東に立花山を望む福岡平野の北東（糟屋平野）に位置する標高 30 m 前後の丘陵の尾根部分に立地する遺跡である。周辺では近年、宅地化が進み、今回の調査地点は旧地形が残る数少ない場所となっている。

### (2) 遺跡の歴史的、地理的環境

高節遺跡（第 1 図 17）周辺には、数多くの遺跡が存在しており、また古墳・古墳群も海岸沿いに伸びた丘陵の両側に点在する（第 1 図）。

周辺の遺跡の主だったものとして、これまで 6 回の調査が行われており、旧石器時代から縄文時代にかけての遺構・遺物、また弥生時代から中世にかけての集落跡が検出されている三苦遺跡（第 1 図 3）や弥生時代から古墳時代にかけての 81 軒の竪穴住居・120 基の土坑・300 基以上の炉跡による住居域、箱式石棺墓・円形周溝墓・方形周溝墓・2 基の円墳による墓域が検出されている唐ノ原遺跡（第 1 図 13）がある。

また当遺跡に近い唐原稲葉遺跡（第 1 図 16）では、第 1 次調査しか行われていないが、弥生時代から古墳時代にかけての溝などが検出されている。仲の原遺跡（第 1 図 18）は弥生時代から古墳時代にかけて、有田原遺跡（第 1 図 19）は弥生時代、塚ノ本池遺跡（第 1 図 20）は弥生時代から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地として認識されているが、これまで試掘調査のみで本調査になった地点がなく、遺跡の詳細な性格は不明である。

高節古墳群（第 1 図 40）と同じ古墳時代後期の古墳・古墳群としては、三苦京塚古墳群 A 群（第 1 図 23）、永浦古墳群 A 群（第 1 図 26）、塚原古墳群山の下支群（第 1 図 30）、宮の前古墳群（第 1 図 35）、高見古墳群 A～C 群（第 1 図 36～38）などが挙げられる。

三苦京塚古墳群 A 群においては 3 基の円墳が検出されており、1 号墳からは坏・細頸壺・甕などの須恵器、鉄製金銅張の杏葉・辻金具などの馬具、ガラス玉・金銅製銀張の耳飾りなどの装身具と共に青銅製の三累環頭柄頭・太刀・刀子・鉄鏃などの武具が出土しており、周辺地域における首長クラスの墳墓であると考えられる。

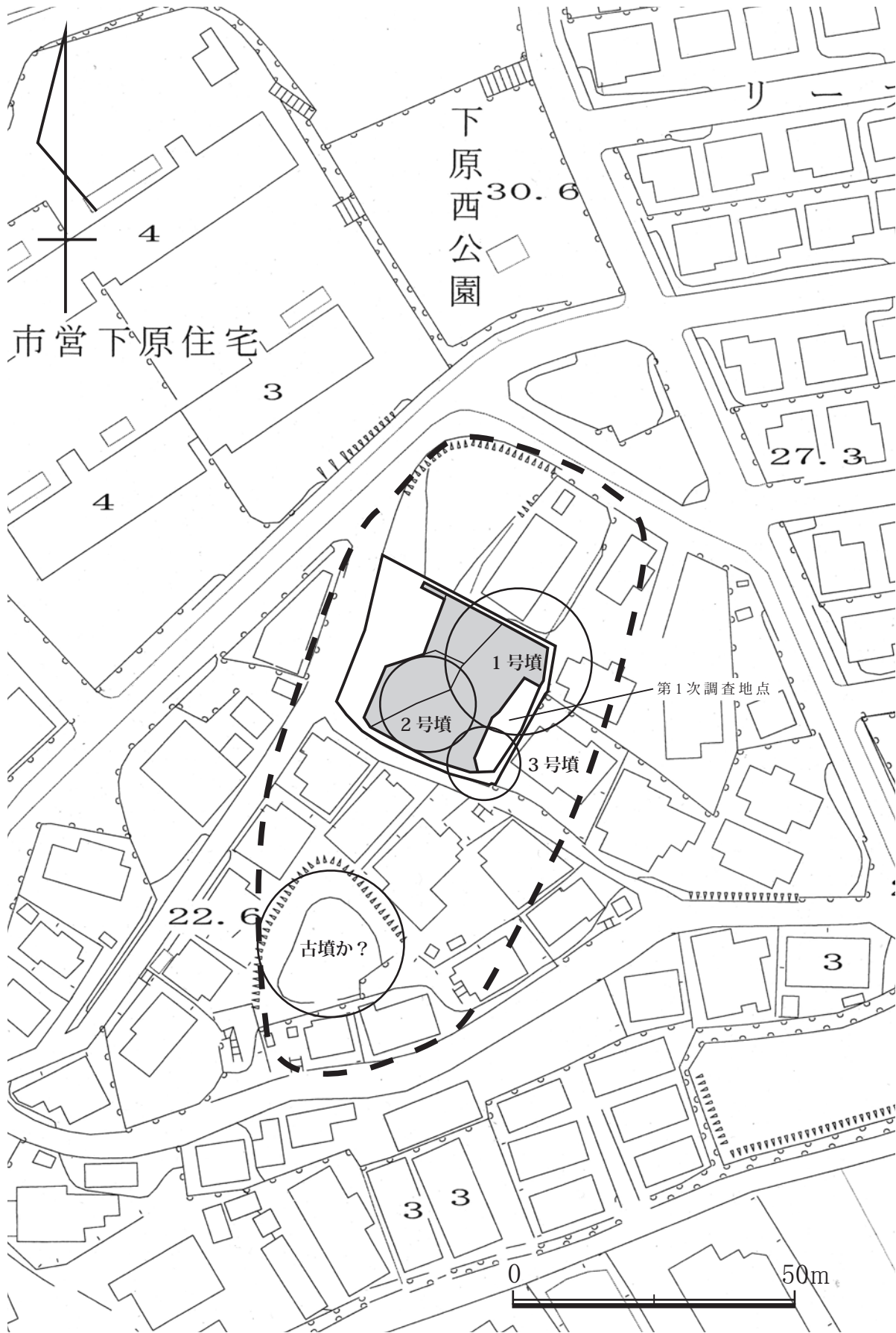
塚原古墳群山の下支群においては 3 基の円墳が、宮の前古墳群においては 3 基の円墳、高見古墳群 A～C 群においては A 群 4 基、B 群 1 基、C 群 1 基の円墳が検出されている。

また永浦古墳群 A 群においては前方後円墳が 2 基検出されている。



1. 釘ヶ浦遺跡    2. 永浦遺跡    3. 三苦遺跡    4. 下和白遺跡    5. 下和白後口遺跡    6. 塚原遺跡    7. 中和白遺跡    8. 力町遺跡
9. 梅ヶ崎遺跡    10. 上和白第一遺跡    11. 上和白遺跡    12. 高見窯跡    13. 唐ノ原遺跡    14. 唐ノ原野添遺跡    15. 秋山谷遺跡
16. 唐原稲葉遺跡    17. 高節遺跡    18. 仲ノ原遺跡    19. 有田原遺跡    20. 塚ノ本池遺跡    21. 香住ヶ丘遺跡
22. 三苦釘ヶ浦古墳    23. 三苦京塚古墳群 A 群    24. 三苦京塚古墳群 B 群    25. 三苦高畑古墳    26. 永浦古墳群 A 群
27. 永浦古墳群 B 群    28. 飛山古墳群    29. 下和白後口古墳群    30. 塚原古墳群山の下支群    31. 中和白古墳    32. 上和白古墳
33. 猿の塚古墳    34. 和白丸山古墳    35. 宮の前古墳群    36. 高見古墳群 A 群    37. 高見古墳群 B 群    38. 高見古墳群 C 群
39. 香住ヶ丘古墳    40. 高節古墳群

第1図 調査地周辺遺跡分布図 (S = 1/25000)



第2図 高節遺跡第2次調査地点位置図 (S = 1/1000)

## 第Ⅲ章 発掘調査の記録

### (1) 調査の概要

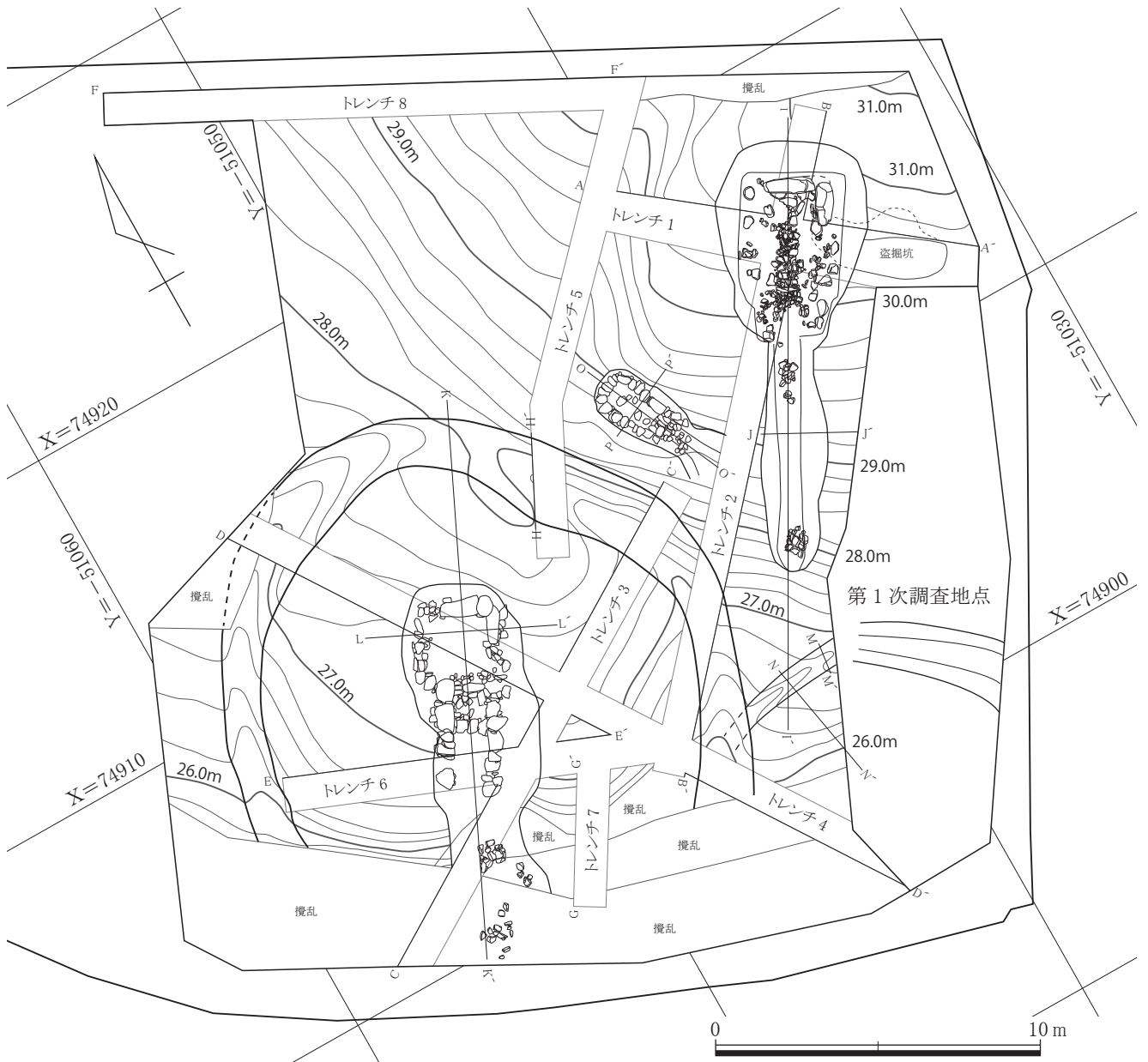
高節遺跡は、東に立花山を望む福岡平野の北東に位置する標高 30 m前後の丘陵の尾根部分に立地する遺跡である。今回の第 2 次調査地点は、遺跡の北側に位置し、平成 30 年 8 月に擁壁工事に伴い実施された第 1 次調査地点と同一の地番内で調査は行われた。周辺では宅地化が進み、当遺跡内では旧地形が残る数少ない場所となっている。

発掘調査は、平成 31 年 4 月 22 日に現場の設営作業及び発掘機材類の搬入作業を行い、翌 23 日から光波測量機器によって世界測地系による基準杭の設置・座標移動及び調査区の設定を行い、4 月 25 日から 26 日にかけて調査対象地の東側 332㎡を調査 I 区として重機による表土剥ぎ取り作業を行った。その後平成 14 年に行われた試掘トレンチの位置をトレンチ 1、1 号墳の墳頂部から裾部にかけてをトレンチ 2、また 2 号墳にトレンチ 3 を、2 号墳から 3 号墳にかけてトレンチ 4 を設定した。連休明けの 5 月 7 日からトレンチ 1・2 の掘削及び 1 号墳・2 号墳盛土面の検出作業、流土層の除去作業を開始した。5 月 14 日にトレンチ 1・2 から 1 号墳石室が検出され、流土層除去後には 1 号墳外護列石及び墓道の平面プランも確認されたが、まずは 1 号墳石室の検出作業及び掘削作業を進めた。6 月 10 日には 2 号墳・3 号墳の周溝を検出し、周溝の掘削作業、トレンチ 3・4 の掘削も開始し、6 月 21 日にはトレンチ 4 から 2 号墳にも石室が存在する事を確認した。2 号墳は調査 II 区にも広がるため、調査 II 区を開始後に本格的に調査する事とし、6 月 26 日に調査 I 区の全景写真を高所作業車から撮影し、その後 1 号墳石室・3 号墳周溝や調査 I 区の等高線などの測量作業を行った。

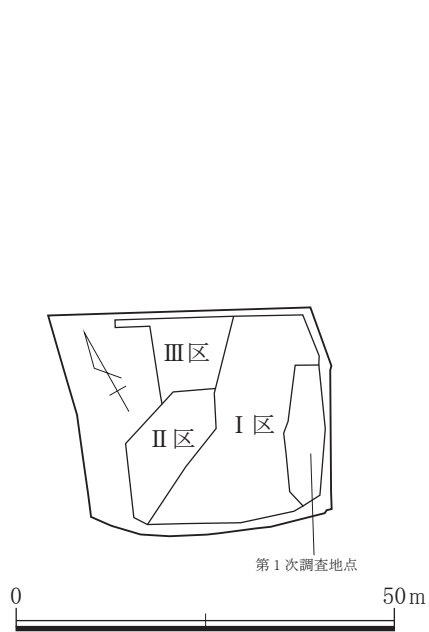
7 月 9 日に重機による調査 II 区 122㎡の表土剥ぎ取り後、トレンチ 4 の延長とトレンチ 6・7 を設定し、翌 10 日から 2 号墳の玄室・羨道の検出・掘削作業及び 1 号墳に新たに I-I' と J-J' 軸を設定した。7 月 26 日に 2 号墳の全景を高所作業車から撮影し、その後 2 号墳に K-K' と L-L' 軸を設定し、2 号墳玄室・羨道や調査 II 区の等高線などの測量作業を行い、8 月 8 日からは 1 号墳墓道の掘削作業も開始した。

2 号墳の調査終了後の 8 月 16 日には調査 I 区南側及び調査 II 区を埋め戻し、調査 III 区 95㎡を重機による表土剥ぎ取り後、翌 17 日から 1 号墳墓道の測量作業と並行して、調査 III 区の調査を開始した。調査 III 区にはトレンチ 8 を設定し、流土層の除去及びトレンチ 8 の掘削後、等高線などの測量作業を行った。最後に 8 月 29 日から 1 号墳外護列石の掘削作業を開始したところ、当初考えていた 1 号墳の外護列石ではなく、小石室である事が判明し、O-O' と P-P' 軸を設定し、掘削作業及び測量作業を開始した。9 月 5 日には調査 III 区の全景写真を撮影し、小石室の調査を 9 月 8 日に終えた。9 日に調査区すべての埋め戻し作業を行い、10 日に現場の撤収作業などを行い、すべての作業を完了した。

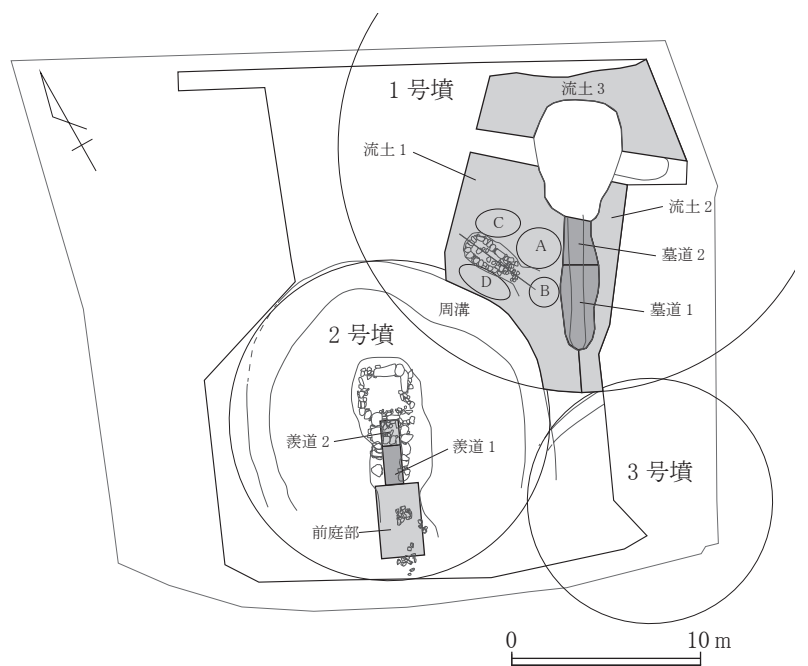
今回の調査で確認された遺構は、古墳が 3 基、石室が 3 基であり、時代は古墳時代 6 世紀後半から 7 世紀初頭にかけてである。出土遺物量は、須恵器・土師器を中心として、コンテナボックス 10 箱を数える。



第3図 遺構配置図 (S = 1/200)

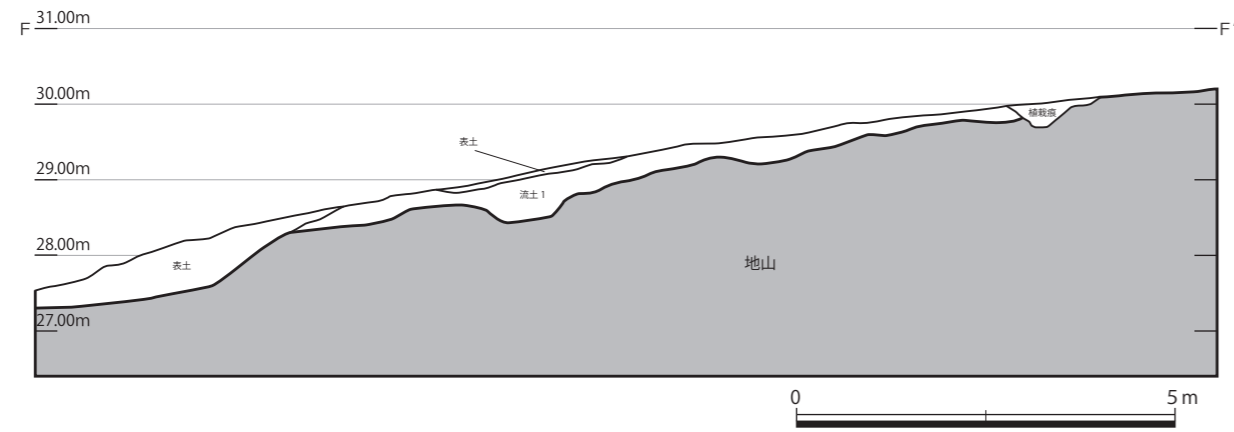


第4図 調査区配置図 (S = 1/1000)

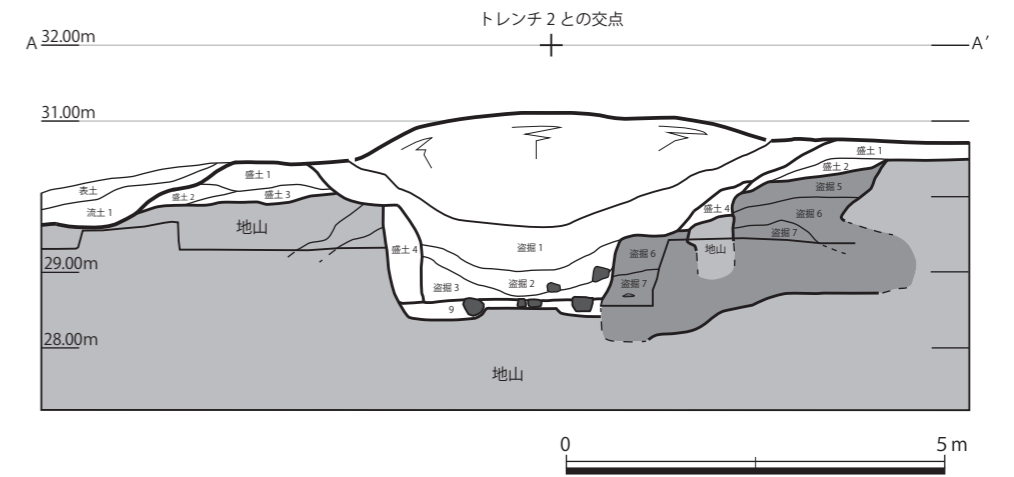


第5図 遺物出土位置図 (S = 1/400)

トレンチ 8 F-F' 断面図



トレンチ 1 A-A' 断面図



**1号墳流土 土層**

1層	5YR5/8	明赤褐色土	しまり普通	遺物含む
----	--------	-------	-------	------

**1号墳盛土 土層**

1層	2.5YR5/8	明赤褐色土	しまり普通	
2層	2.5YR7/6	明黄褐色土	しまり普通	
3層	5YR5/8	明赤褐色土	しまり強い	
4層	2.5YR5/6	明赤褐色土	しまり普通	石室裏込め

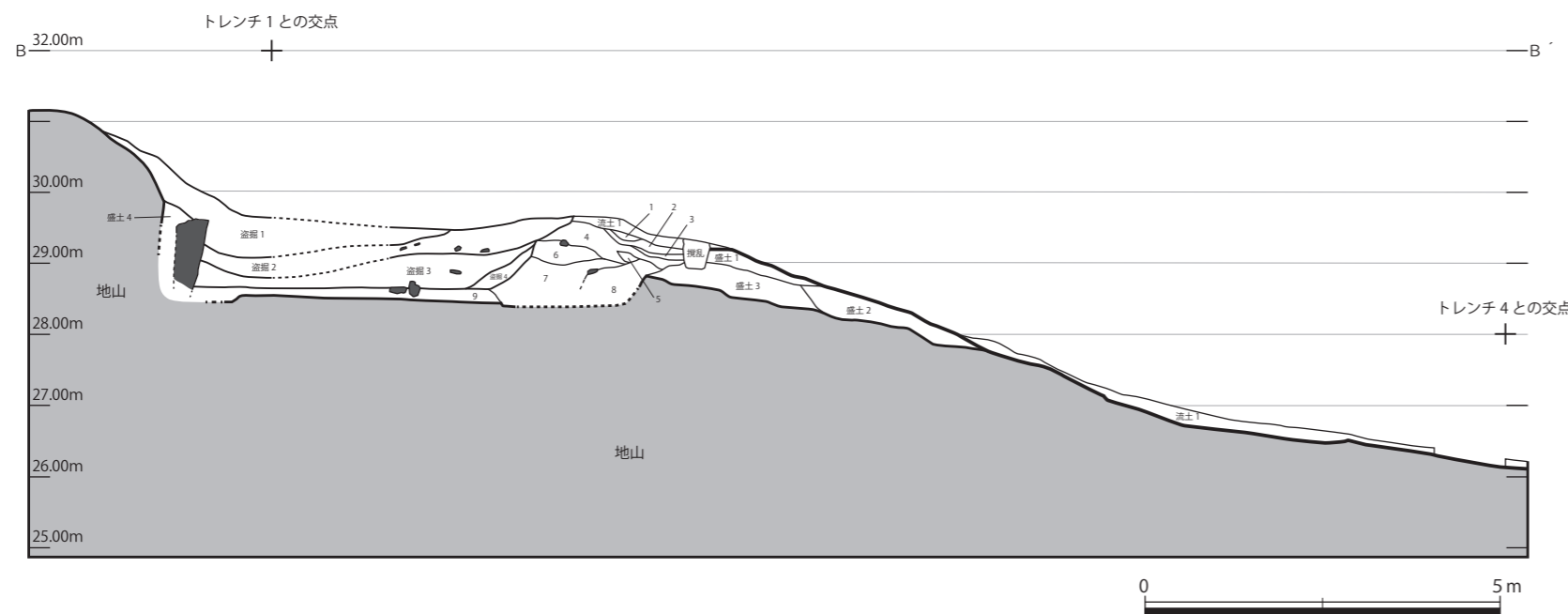
**1号墳埋土 土層**

1層	5YR5/6	明赤褐色土	しまり普通	
2層	5YR4/4	にぶい赤褐色土	しまり弱い	
3層	5YR5/6	明赤褐色土	しまり弱い	
4層	7.5YR5/6	明褐色土	しまり普通	
5層	5YR4/4	にぶい赤褐色土	しまり普通	
6層	2.5YR5/8	明赤褐色土	しまり普通	
7層	5YR5/6	明赤褐色土	しまり強い	
8層	5YR4/6	赤褐色土	しまり強い	
9層	2.5YR5/6	明赤褐色土	しまり強い	貼り床

**1号墳盗掘 土層**

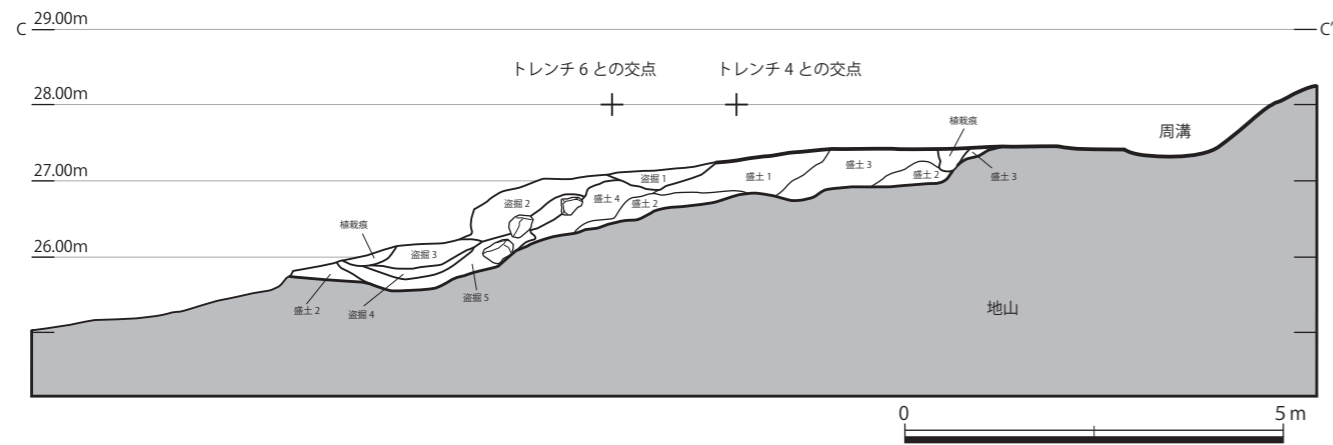
1層	7.5YR5/6	明褐色土	しまり弱い	
2層	5YR5/6	明赤褐色土	しまり弱い	小石多く含む
3層	7.5YR4/6	褐色土	しまり普通	人頭大の石多く含む
4層	5YR4/4	赤褐色土	しまり普通	人頭大の石多く含む
5層	5YR5/8	明赤褐色土	しまり弱い	
6層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	しまり弱い	
7層	5YR4/8	赤褐色土	しまり弱い	

トレンチ 2 B-B' 断面図

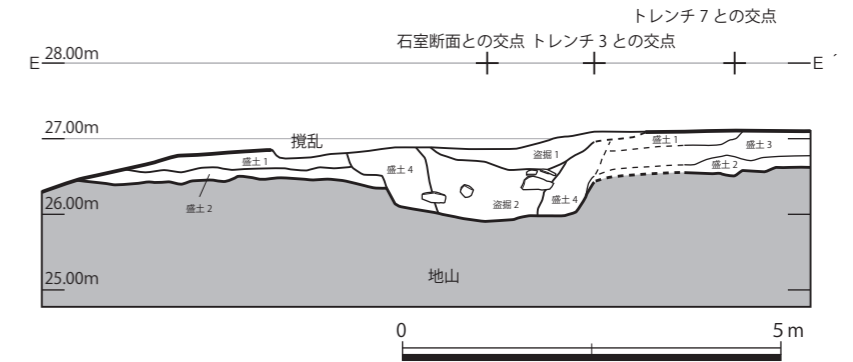


第6図 トレンチ断面図その1 (S = 1/100)

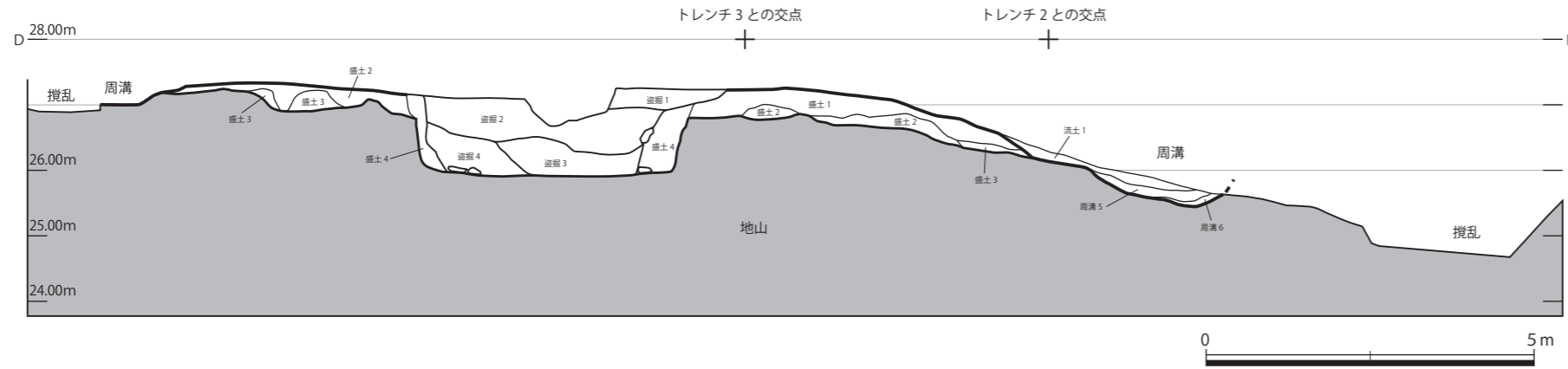
トレンチ3 C-C' 断面図



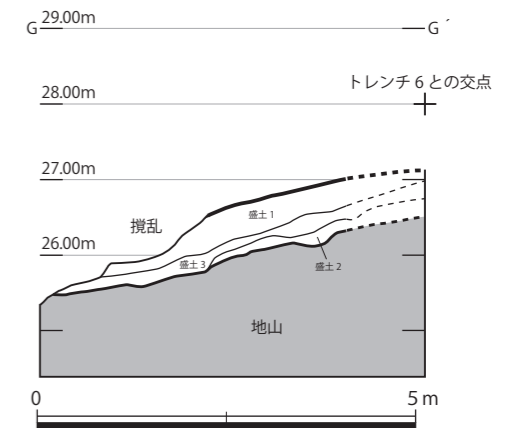
トレンチ6 E-E' 断面図



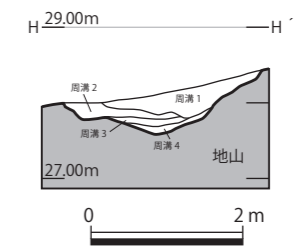
トレンチ4 D-D' 断面図



トレンチ7 G-G' 断面図



2号墳周溝 H-H' 断面図



2号墳流土 土層			
1層	7.5YR5/4	にぶい褐色土	しまり普通 遺物含む

2号墳盛土 土層			
1層	2.5YR5/8	明赤褐色土	しまり普通
2層	2.5YR7/6	明黄褐色土	しまり普通
3層	1層と2層が混ざりあった土層		しまり普通
4層	2.5YR5/6	明赤褐色土	しまり普通 石室裏込め

2号墳盗掘 土層			
1層	7.5YR5/6	明褐色土	しまり弱い
2層	7.5YR5/6	明赤褐色土	しまり弱い
3層	7.5YR4/6	褐色土	しまり普通
4層	2.5YR5/6	明赤褐色土	しまり普通
5層	7.5YR4/6	褐色土	しまり弱い

2号墳周溝 土層			
1層	7.5YR4/6	褐色土	1~3mm大の白色粒を中量、炭化粒を微量含む しまり普通
2層	5YR4/8	赤褐色土	1~3mm大の白色粒を中量含む しまり普通
3層	7.5YR4/4	褐色土	1~3mm大の白色粒を少量、炭化粒を微量含む しまり普通
4層	2.5YR4/6	赤褐色土	1~3mm大の白色粒を中量含む しまり強い
5層	7.5YR4/2	灰褐色土	1~3mm大の白色粒を少量含む しまり普通
6層	7.5YR5/6	明褐色土	1~3mm大の白色粒を少量、炭化粒を微量含む しまり普通

第7図 トレンチ断面図その2 (S = 1/100)



## (2) 遺構と遺物

### 1) 1号墳(第8・19・20図)

調査I区からⅢ区にかけて検出された円墳である。

墳丘は、北西部(Ⅲ区)には、盛土層は確認されず(トレンチ8)、地山整形で形作られているが、南部では、トレンチ2で確認できるように大部分は地山整形であるが、一部は盛土で形作られている。

墳丘の墳頂部は標高31.2mを測るが、古墳主体部が石取りによる盗掘を受けており、それより高い32mほどの高さであった可能性がある。また裾部と考えられる地点の標高は、27mを測る。

古墳主体部の玄室を古墳の中心として考えると、推定径26m、高さ5m程の円墳であると考えられる。

主体部は主軸方位をN-30°-Eにとる横穴式石室で南西方向に開口する。石室は盛土と地山を掘り込んで作られている。石取りの盗掘により奥壁・左側壁の一部を除いて損傷は激しいが、框石が奥壁から2.8mの位置にある事から、玄室は複室であった可能性が高い(第20図)。後室の規模は幅約1.8m、長さ約2.8m、床面からの残存高1.0mを測る。床面は10~50cm大の平石と5~10cm大の小石で敷かれており、範囲は框石の幅で奥壁に向かって敷き詰められているが、左右は盗掘時に攪乱を受けての消失と思われる。前室の規模は幅約1.8m、長さ約0.9mを測る。床面は10~20cm大の平石と5~10cm大の小石で敷かれている。

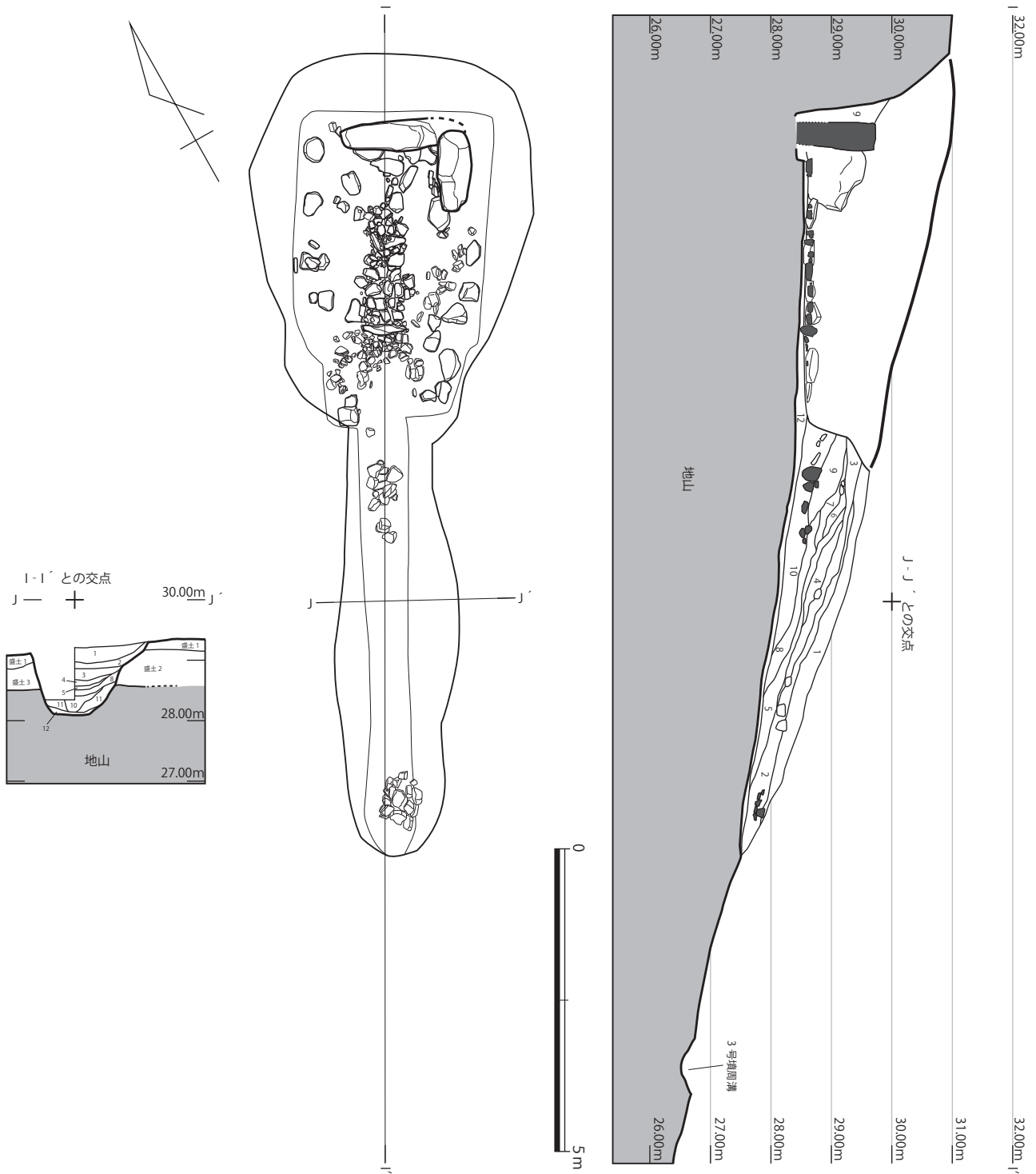
墓道は、標高28.3m地点から27.5m地点へと緩やかに下っており、全長7.0m、幅1.4~2.0を測り、断面形は逆台形状をなす。

また石取りの盗掘とは別に玄室の南東部に盗掘坑(第6図)があり、トレンチ1断面図の盗掘5~7の土層にあるように左側壁より下に潜り込んでいる事から、石取りの盗掘以前に副葬品などは、すでに盗掘を受けていたと思われる。

遺物18は石室内盗掘の埋土内から検出されており、元位置を留めていないが、墓道出土の遺物19~30は貼り床直上で検出されており、元位置を留めていると思われる。また遺物1~17は、小石室周辺の流土層から検出されており、小石室においての祭祀に使われた可能性が高い。

出土遺物などから、造営時期は6世紀後半と考えられる。

**流土1A遺物(第9図)** 1~9は須恵器。10は陶質土器。11~12は鉄製品。1は坏蓋。口径11.1cm、器高3.5cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ヘラケズリ、天井部はヘラケズリ、ヘラ記号あり。2は坏蓋。口径11.3cm、器高3.6cm。内面はナデ。外面はナデ、天井部はヘラケズリ。3は坏蓋。口径11.1cm、器高3.0cm。内面はナデ、外面は回転ナデ、天井部はヘラケズリ。4は坏身。口径9.3cm、受部径11.2cm、器高3.5cm。内面はナデ、外面は回転ナデ、底部はヘラケズリ。5は小型壺。口径7.0cm、胴部11.0cm、器高5.1cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部はヘラケズリ。6は高坏。頸部径4.5cm、底径12.2cm、残存高11.3cm。坏部の内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後に搔き目。脚部の内面は回転ナデ、外部は回転ナデ後に搔き目と沈線。スカシが3方向に施される。7は甕。口径13.8cm、胴部径31.2cm、器高31.0cm。内面の口縁部は回転ナデ、胴部は同心円状の当て具によるタタキ。外面の口縁部は回転ナデ、胴上部は平行のタタキ後搔き目、中部から下部は格子状のタタキ。8は甕。口径25.7cm、胴部径43.3cm、器高48.0cm。内面の口縁部は回転ナデ、胴上部から中部は平行の当て具、下部は同心円状の当て具によるタタキ。外面の口縁部は回

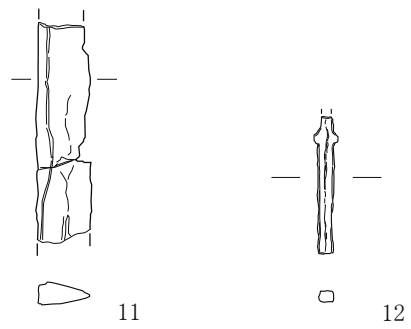
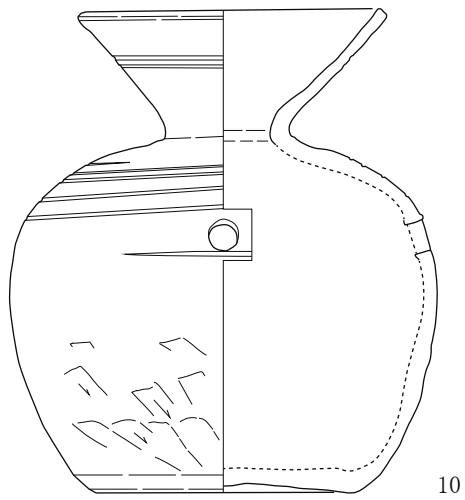
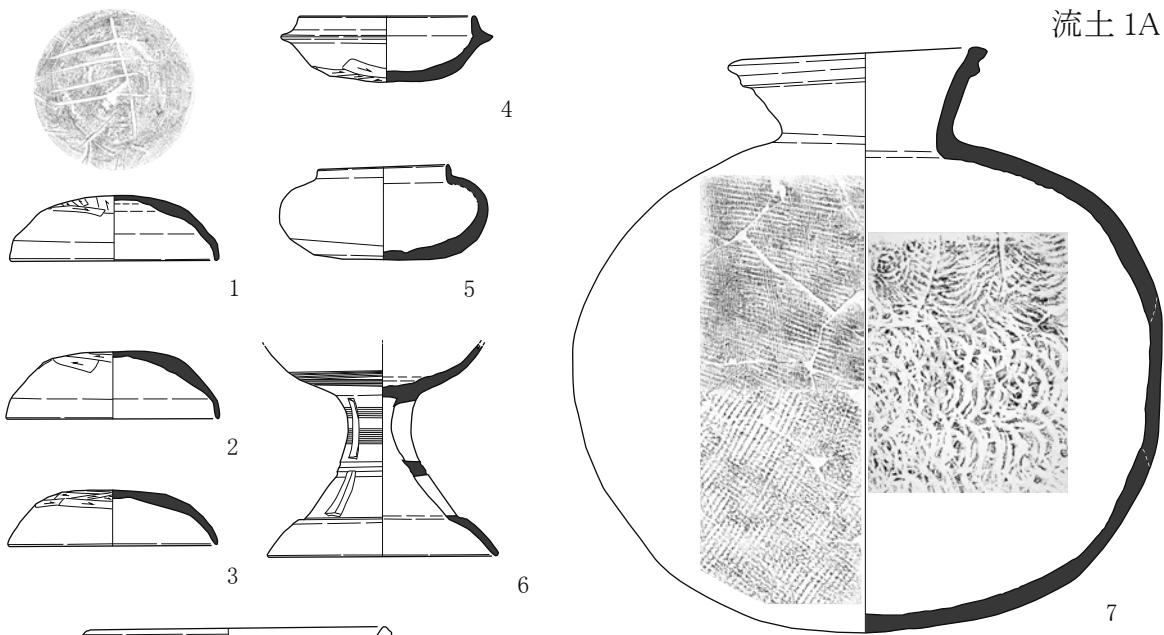


### 1号墳 土層

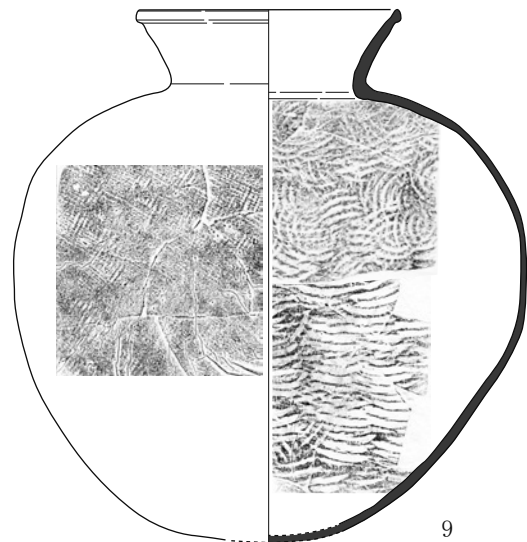
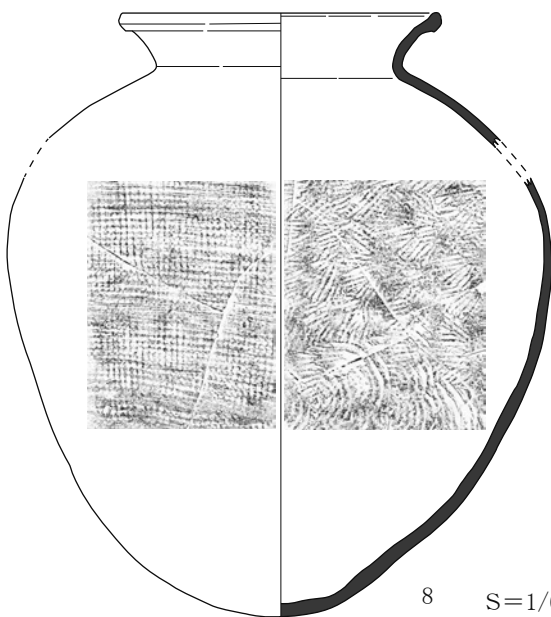
1層	2.5YR5/8	明赤褐色土	流土1と同じ	7層	5YR4/4	にぶい赤褐色土	しまり弱い
2層	7.5YR4/4	褐色土	しまり弱い	8層	5YR3/4	暗赤褐色土	しまり弱い
3層	2.5YR5/6	明赤褐色土	しまり普通	9層	2.5YR5/8	明赤褐色土	しまり普通 石室裏込め土
4層	7.5YR4/4	褐色土	しまり普通	10層	7.5YR4/3	褐色土	しまり普通 石・遺物多く含む
5層	7.5YR3/2	黒褐色土	しまり弱い	11層	5YR5/4	にぶい赤褐色土	しまり普通
6層	5YR4/6	赤褐色土	しまり普通	12層	2.5YR5/6	明赤褐色土	しまり強い 貼り床

第8図 1号墳 (S = 1/100)

流土 1A

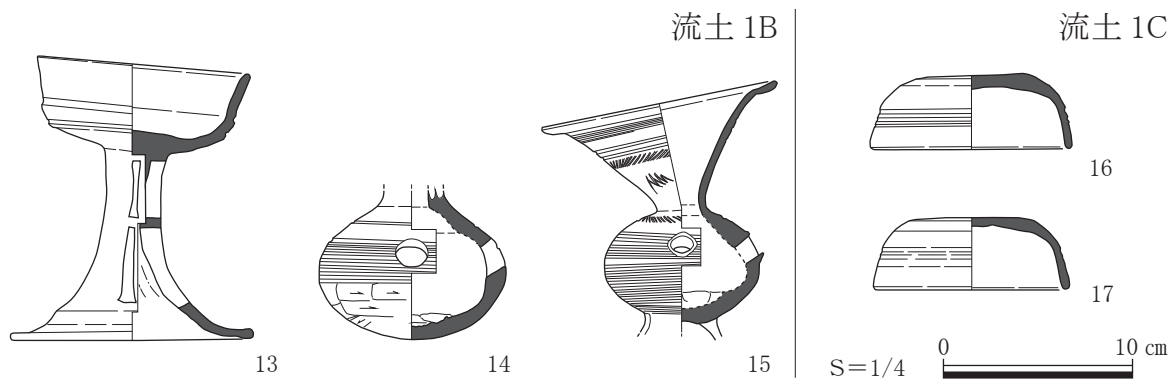


S=1/4 0 10 cm

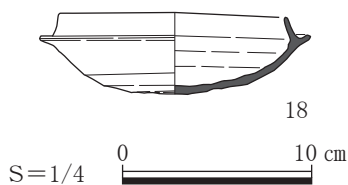


8 S=1/6 0 10 cm

第9図 1号墳流土 1A 遺物 ( S = 1/4 · 1/6 )



第10図 1号墳流土 1B・1C 遺物 ( S = 1/4 )



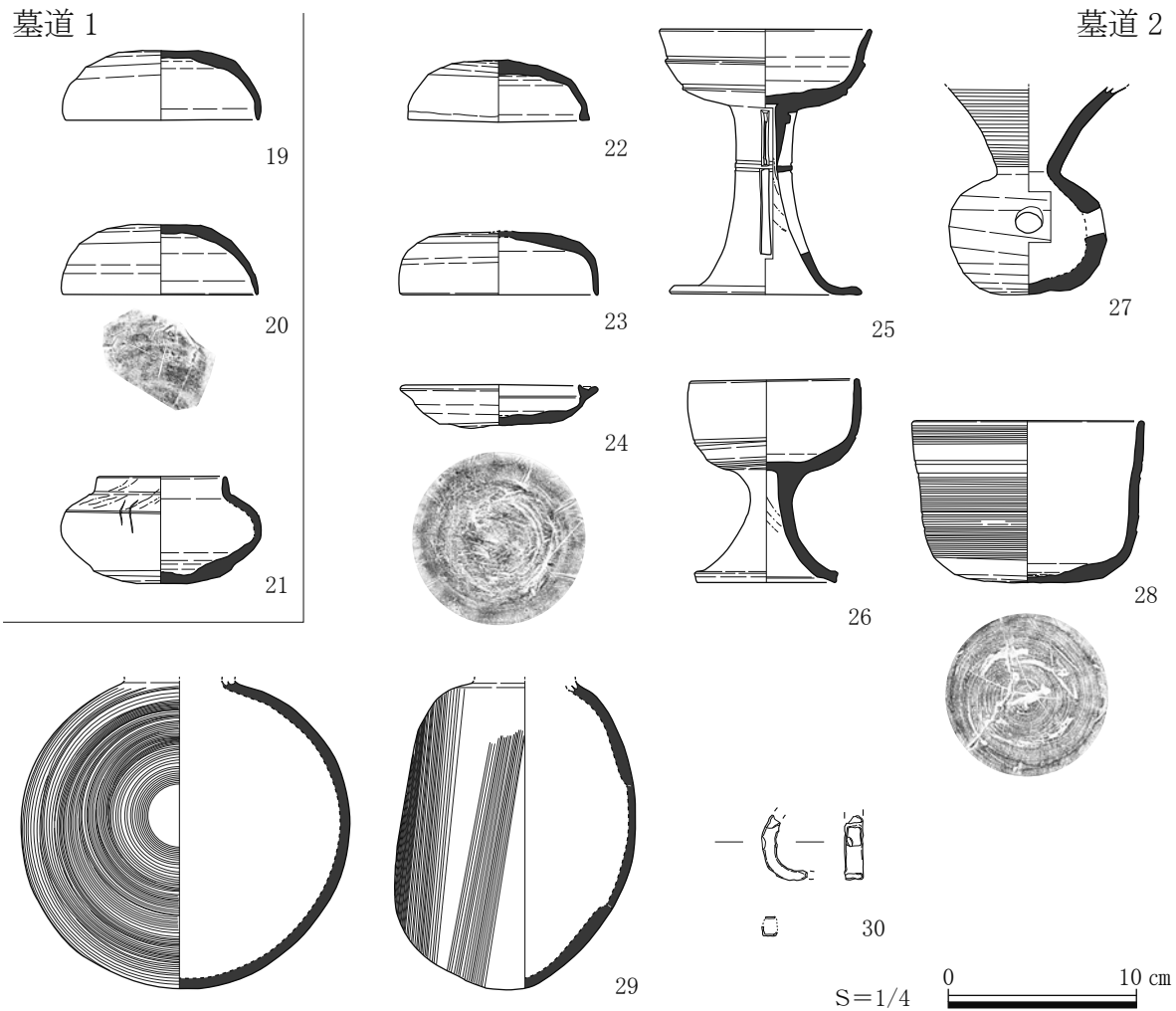
第11図 1号墳石室遺物 ( S = 1/4 )

18は須恵器の坏身(歪みあり)。口径 12.2 ~ 12.6cm、受部径 13.9 ~ 14.8cm、器高 4.3cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、灰被り痕あり。

19は須恵器。口径 10.3cm、器高 3.7cm。内面は回転ナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。20は坏蓋。口径 10.4cm、器高 4.8cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ、ヘラ記号あり。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。21は小型壺。口径 6.9cm、胴部径 10.6cm、器高 5.7cm。内面は回転ナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、口縁部から胴部にかけて絞り痕、胴部にヘラ記号あり。22は坏蓋。口径 9.6cm、器高 3.3cm。内面は回転ナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ、灰被り痕跡あり。23は坏蓋。口径 10.7cm、器高 4.0cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ後沈線、天井部は回転ヘラケズリ。24は坏蓋。口径 10.4cm、器高 3.8cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。

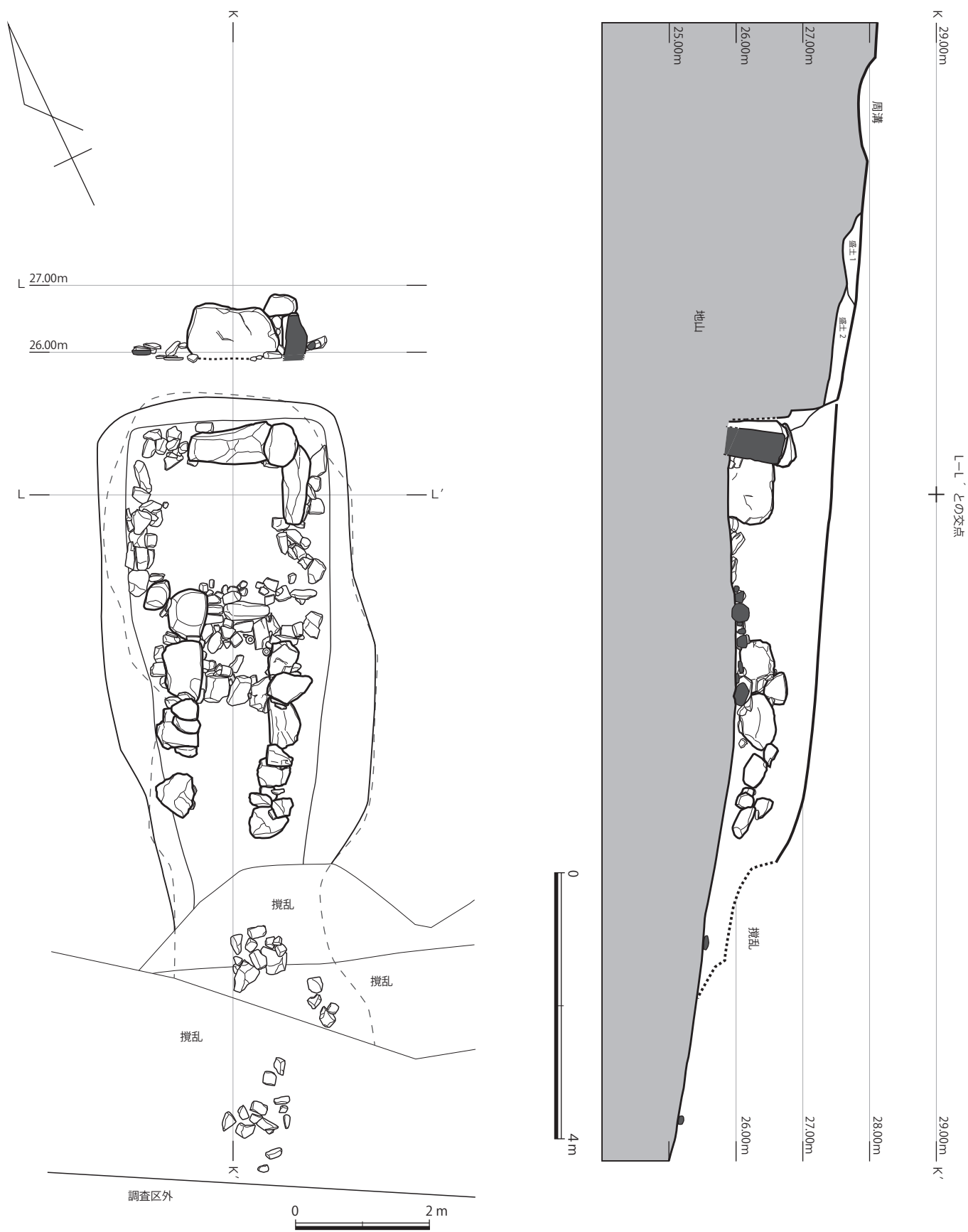
25は須恵器の坏身(歪みあり)。口径 12.2 ~ 12.6cm、受部径 13.9 ~ 14.8cm、器高 4.3cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、灰被り痕あり。

26は須恵器。口径 12.7cm、頸部径 2.6cm、胴部径 8.2cm、残存高 13.7cm。内面の口縁部は回転ナデ、胴部は不明。外面の口縁部は回転ナデ後掻き目・沈線・刺突文様あり、胴部は掻き目、刺突文様あり、脚部の調整は不明、スカシが4方向に施される。27は須恵器。口径 11.5cm、頸部径 3.3cm、底径 12.8cm、器高 15.1cm。坏部は内外面ともに回転ナデ、内面底部はナデ。脚部内面は絞り痕あり、外面は回転ナデ、スカシが4方向に施される。坏部・脚部外面に灰被り痕あり。28は須恵器。口径 21.0cm、胴部径 40.7cm、器高 42.4cm。内面の口縁部は回転ナデ、胴部は同心円状の当て具によるタタキ。外面の口縁部は回転ナデ、胴部は平行のタタキ後掻き目。口縁部内面および胴上部外面に灰被り痕あり。29は須恵器。口径 16.4cm、胴部径 22.6cm、底径 13.6cm、器高 25.6cm。内面は回転ナデ。外面の口縁部は回転ナデ、頸部から胴上部にかけては掻き目の後に沈線、胴下部は斜め方向のケズリ。30は鉄製品。長さ (11.7) cm、幅 3.0cm、厚さ 1.2cm。31は鉄製品。長さ (7.2) cm、幅 1.2cm、厚さ 0.6cm。



第 12 図 1 号墳墓道 1・2 遺物 ( S = 1/4 )

径 10.5cm、器高 3.4cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。**24** は坏身 (歪みあり)。口径 8.6 ~ 9.0cm、受部径 10.3 ~ 10.7cm。器高 2.3cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。**25** は高坏。口径 12.5cm、頸部径 3.7cm。底径 10.2cm。器高 14.1cm。坏部の内面は回転ナデ、底部はナデ。坏部の外面は回転ナデ後沈線、胴部から底部にかけて掻き目。脚部内面は回転ナデ、絞り痕あり。外面は回転ナデ後沈線。スカシが 4 方向に施される。坏部・脚部外面に灰被り痕あり。**26** は高坏。口径 8.9cm、頸部径 3.2cm。底径 7.4cm。器高 10.8cm。坏部は内外面ともに回転ナデ。脚部内面は絞り痕あり。外面は回転ナデ。**27** は甕 (ハソウ)。口径不明、頸部径 3.4cm、胴部径 8.4cm、残存高 11.4cm。内面の口縁部は回転ナデ、胴部は不明。外面の口縁部は掻き目、口縁部から胴部にかけて回転ナデ、胴部は回転ヘラケズリ。**28** は小型壺。口径 12.4cm、器高 8.6cm。内面は回転ナデ。外面は掻き目の後沈線、底部は回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。**29** は提瓶。頸部径 5.5 ~ 6.0cm、胴部径 17.4cm、残存高 16.4cm。内面は回転ナデ。外面は掻き目、灰被り痕あり。**30** は不明鉄製品。長さ (3.4) cm、幅 2.4cm、厚さ 1.0 cm。中心部は空洞になっており、馬具等の一部あるいは漁労具の一部か。



第13図 2号墳 (S = 1/80)

## 2) 2号墳(第13・19・20図)

調査Ⅰ区からⅡ区にかけて検出された円墳である。

墳丘はトレンチ3・トレンチ4で確認できるように下3分の2が地山整形で、上3分の1が盛土によって形作られている。

墳丘の墳頂部は標高27.5mを測るが、古墳主体部が石取りによる盗掘を受けており、それより高い28.5m程の高さであった可能性がある。また周りには周溝が掘られている。墳丘南側は、道路などの切り下げによる攪乱を受けているが、裾部の標高は26m前後であったと思われ、2号墳は推定径17m、高さ2.5m程の円墳であると考えられる。

主体部は主軸方位をN-25°-Eにとる横穴式石室で、南西方向に開口する。石室は盛土と地山を掘り込んで作られている。石取りの盗掘により天井石は、抜き取られているが、玄室及び羨道の形状は良く残っており、玄室は幅約1.6m、長さ約1.8m、床面からの残存高1.0mを測る。床面には石が敷かれた跡は確認できなかった。羨道は幅0.9m、長さ約3.7mを測る。

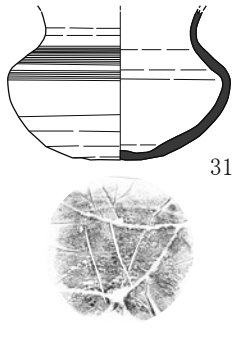
羨道2遺物50～54・56は羨道床直上から検出されており、元位置を留める。前庭部は、かなり攪乱を受けているが、出土遺物は床面で検出されており、ほぼ元位置を留めると思われる。

出土遺物などから、造営時期は6世紀後半から7世紀初頭と考えられる。

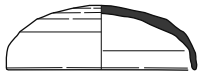
**周溝遺物(第14図) 31**は須恵器の小型壺。口径不明、頸部径8.5cm、胴部径11.8cm、残存高8.0cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ後掻き目、底部は回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。

**前庭部遺物(第14図) 32～48**は須恵器。**32**は坏蓋。口径10.1cm、器高3.4cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。**33**は坏蓋。口径10.2cm、器高3.1cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。**34**は坏蓋。口径9.4cm、器高3.8cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。**35**は坏蓋。口径9.6cm、器高2.8cm、つまみ高0.8cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ナデ後掻き目、灰被り痕あり。**36**は坏蓋。口径10.5cm、器高2.4cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。**37**は坏身(歪みあり)。口径8.8～9.4cm、受部径10.8～11.0cm、器高3.7cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ。**38**は坏身。口径9.5cm、受部径10.7cm、器高3.5cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ。**39**は坏身。口径9.6cm、受部径11.5cm、器高4.0cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ後ナデ。**40**は坏身。口径9.8cm、受部径11.4cm、器高3.1cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ。**41**は坏身。口径10.2cm、受部径12.0cm、器高3.4cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ後ナデ、ヘラ記号あり。**42**は坏身。口径10.8cm、受部径12.8cm、器高4.1cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、ヘラ記号、灰被り痕あり。**43**は坏身。口径10.7cm、受部径13.0cm、器高4.1cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ。**44**は脚付き碗。口径8.0cm、頸部径2.2cm、底径5.9cm、器高7.9cm。内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後沈線。脚部内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後沈線。碗内外面・脚部外面に灰被り痕あり。**45**は脚付き碗(歪みあり)。口径8.1cm、頸部径3.0cm、底径8.1cm、器高9.3～10.5cm。内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後沈線。脚部内面は回転ナデ、絞り痕あり、外面は回転ナデ、絞り痕あり。**46**は脚付き壘(ハソウ)。口径10.1cm、底径8.2cm、胴部7.8cm、器

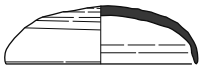
周溝



31



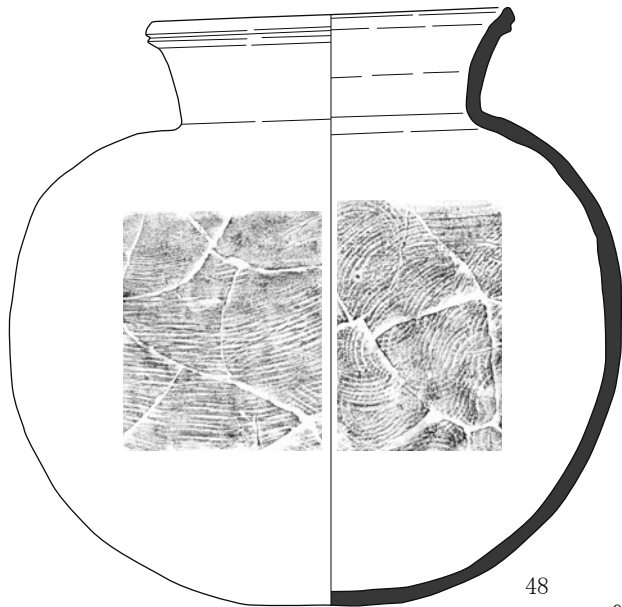
32



33



34

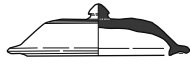


48

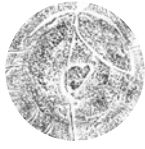
S=1/4



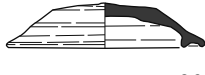
前庭部



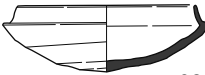
35



36



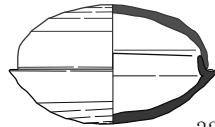
37



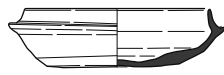
38



39



32+37



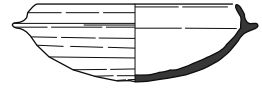
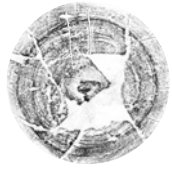
40



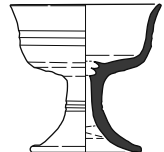
41



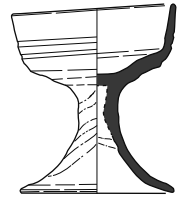
42



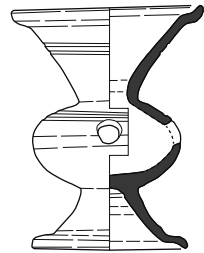
43



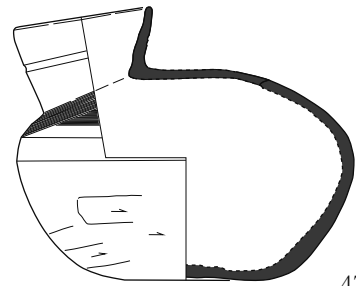
44



45



46

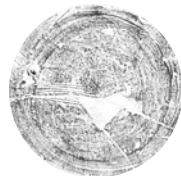


47

羨道 1



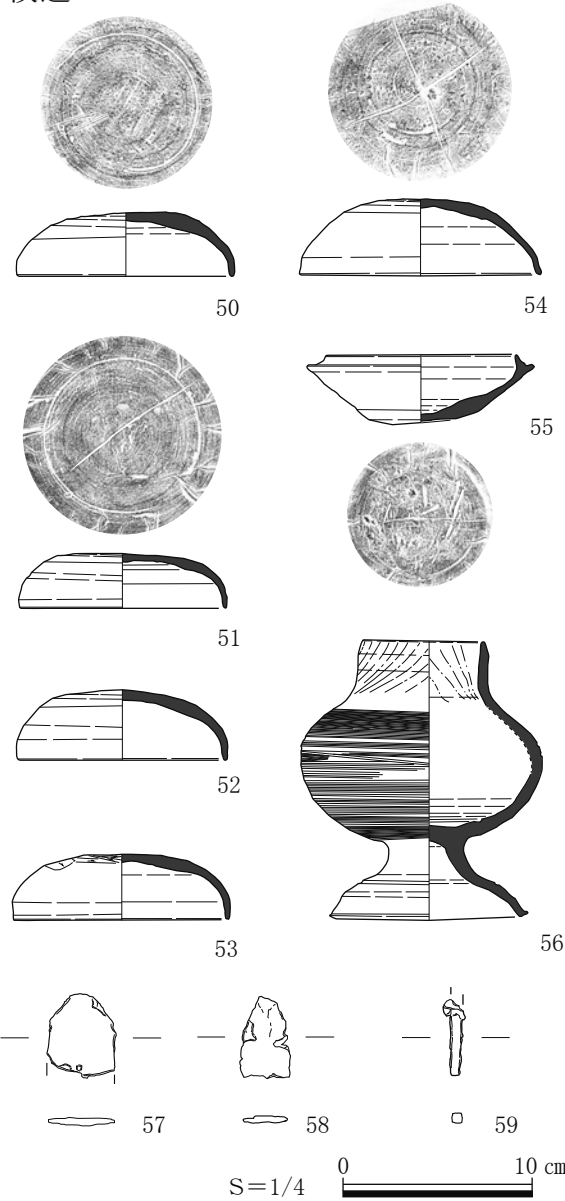
49



第 14 图 2 号墳周溝・前庭部・羨道 1 遺物 ( S = 1/4 )



羨道 2



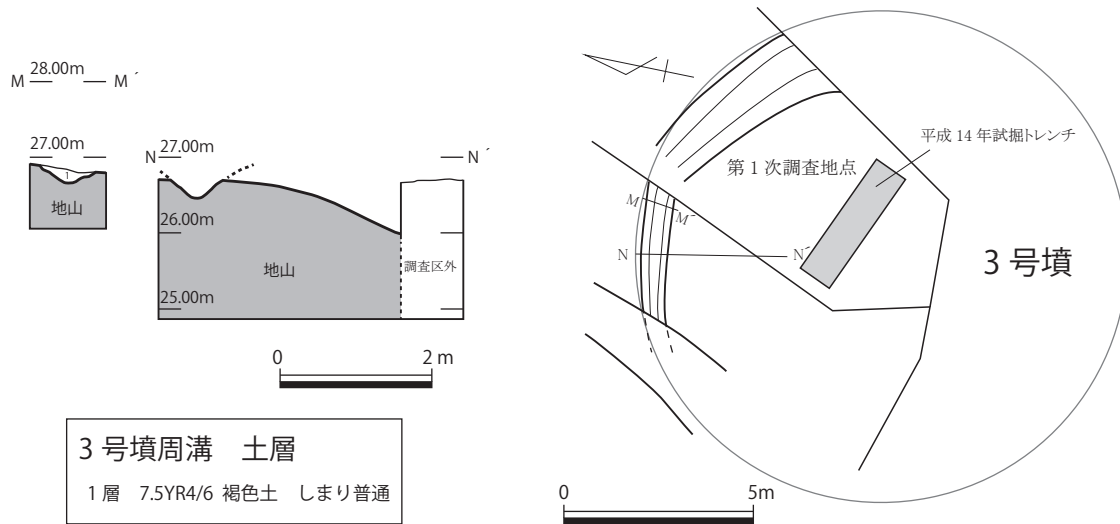
第 15 図 2 号墳羨道 2 遺物 ( S = 1/4 )

cm、器高 3.5cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部はヘラケズリ。54 は坏蓋。口径 12.8cm、器高 4.1cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。55 は坏身。口径 10.0cm、受部径 12.0cm、器高 3.7cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ。56 は脚付き壺。口径 6.5cm、胴部径 12.8cm、底径 10.5cm、器高 14.9cm。内面は回転ナデ、底部はナデ、絞り痕あり。外面の口縁部は回転ナデ、胴部は回転ヘラケズリ後搔き目・沈線、絞り痕あり。脚部内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後沈線。57 は小札か。長さ (4.4) cm、幅 3.6cm、厚さ 0.5cm。58 は小札か。長さ (4.3) cm、幅 2.7cm、厚さ 0.4cm。59 は鉄鏃。長さ (4.0) cm、幅 0.6cm、厚さ 0.5cm。

高 12.9cm。内面の口縁部は回転ナデ、胴部・底部は不明。外面は回転ナデ後沈線。脚部内面・外面ともに回転ナデ。口縁部・胴下部・脚部外面に灰被り痕あり。47 は平瓶。口径 7.4cm、胴部 17.8cm、底部 7.0cm、器高 14.5 cm。内面の口縁部は回転ナデ、胴部は不明。外面の口縁部は回転ナデ後沈線、頸部から胴部にかけて搔き目、胴部はケズリ後ナデ、底部はナデ。48 は甕 (歪みあり)。口径 19.6 ~ 20.0cm、胴部 32.4cm、器高 31.7cm。内面の口縁部から胴上部にかけては回転ナデ、胴中部から底部にかけては同心円状の当て具によるタタキ。外面の口縁部は回転ナデ、胴上部は搔き目、胴中部から底部にかけてはタタキ後搔き目。

羨道 1 遺物 (第 14 図) 49 は須恵器の坏身。口径 10.4cm、受部径 12.4cm、器高 3.7cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面の口縁部から胴部にかけては回転ナデ、胴中部は回転ヘラケズリ、底部はナデ、ヘラ記号あり。

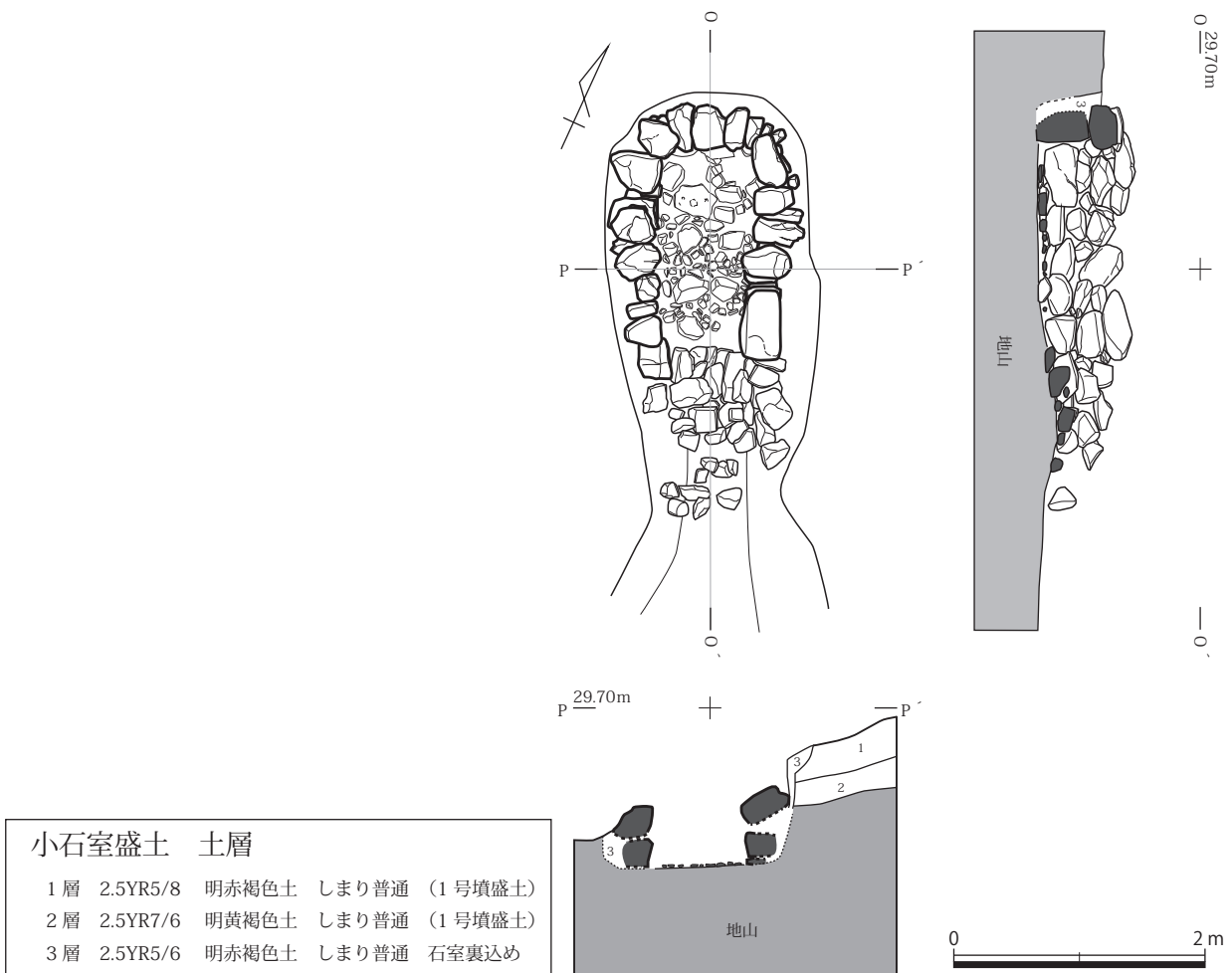
羨道 2 遺物 (第 15 図) 50 ~ 56 は須恵器。57 ~ 59 は鉄製品。50 は坏蓋。口径 10.7cm、器高 2.9cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、胴上部は回転ヘラケズリ、天井部はヘラケズリ、ヘラ記号あり。51 は坏蓋。口径 11.4cm、器高 3.9cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。52 は坏蓋。口径 11.0cm、器高 3.8cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。53 は坏蓋。口径 11.4



第16図 3号墳 (S = 1/100・1/200)

### 3) 3号墳 (第16・19図)

調査I区南東隅から検出された周溝のみであったが、平成30年の第1次調査で周溝が確認され、須恵器が出土している事、平成14年の試掘では土坑状の落ち込みから裏込め石と思われる礫が検出されている事から古墳の周溝である可能性が高く、推定径約13mの円墳であると考えられる。



第17図 小石室 (S = 1/60)

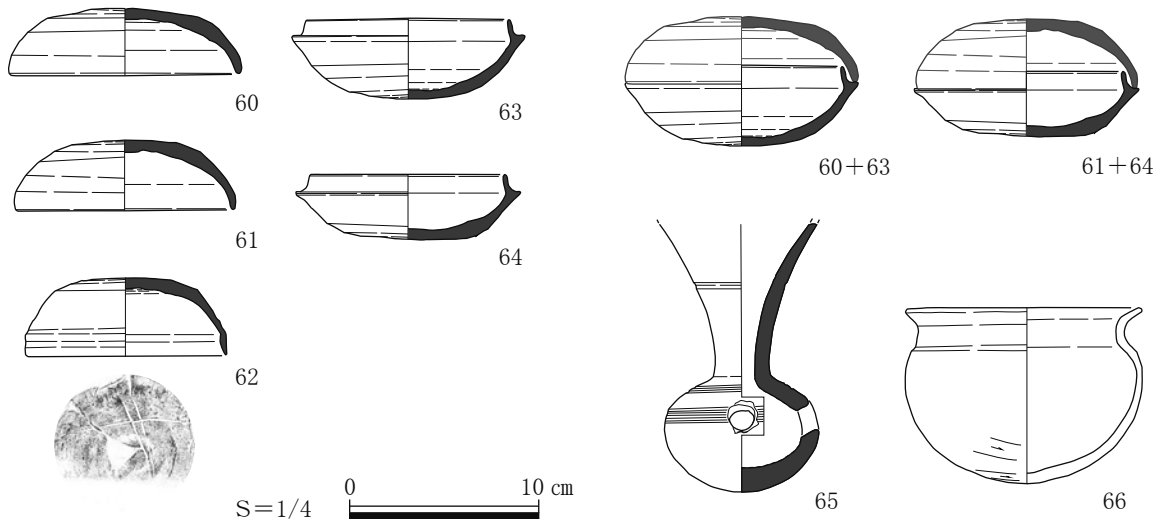
#### 4) 小石室 (第 17・20 図)

調査 I 区から検出され、当初は 1 号墳の外護列石と考えていたが調査を進めたところ、外護列石ではなく小石室である事が判明した。

墳丘部は、調査開始前の現況観測においても高まりが確認されておらず、石室は石取りの盗掘により天井石が抜き取られており、その時に消失したか、あるいは墳丘自体築かれなかった可能性もある。

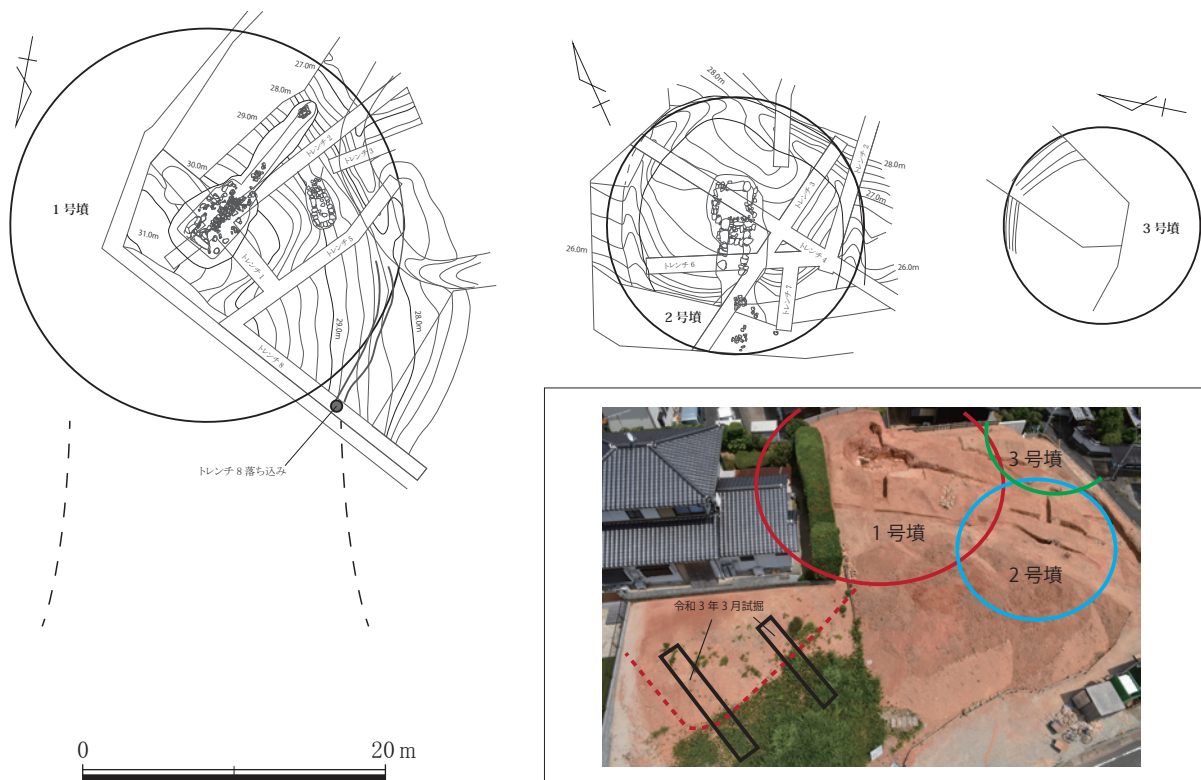
主体部は主軸方位を N - 25° - W にとる横穴式石室で、南東方向に開口する。石室は 1 号墳の盛り土と地山を掘り込んで作られている。石取りの盗掘により天井石は抜き取られているが、玄室の奥壁、左右側壁は良く残っており、奥幅 0.8m、前幅 0.65m、左右側壁長 1.6m、床面からの残存高 0.7m を測る。床面は 15 ~ 30cm 大の平石と 5 ~ 10cm 大の小石で敷き詰められている。羨道部分は残存状態が悪く、正確な計測は出来ず。

遺物 60・61・63・64 は玄室床直上から検出されており、元位置を留めると思われる。出土遺物などから、造営時期は 7 世紀初頭と考えられる。



第 18 図 小石室遺物 (S = 1/4)

小石室遺物 (第 18 図) 60 ~ 65 は須恵器。66 は土師器。60 は坏蓋。口径 12.2cm、器高 3.6cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ、灰被り痕あり。61 は坏蓋。口径 11.5cm、器高 3.7cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。62 は坏蓋。口径 10.6cm、器高 4.2cm。内面は回転ナデ、天井部はナデ、ヘラ記号あり。外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。63 は坏身。口径 10.8cm、受部径 12.3cm、器高 4.3cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ、灰被り痕あり。64 は坏身。口径 10.4cm、受部径 11.9cm、器高 3.5cm。内面は回転ナデ、底部はナデ。外面は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ。65 は甕 (ハソウ)。口径不明。頸部径 3.1cm、胴部径 8.2cm、残存高 14.1cm。内面は回転ナデ、胴部は不明。外面の口縁部から胴上部にかけては回転ナデ後沈線・搔き目、胴中部から下部にかけてはナデ。66 は小型壺。口径 12.5cm、器高 9.3cm。内面はナデ。外面は回転ナデ、胴下部はケズリ。



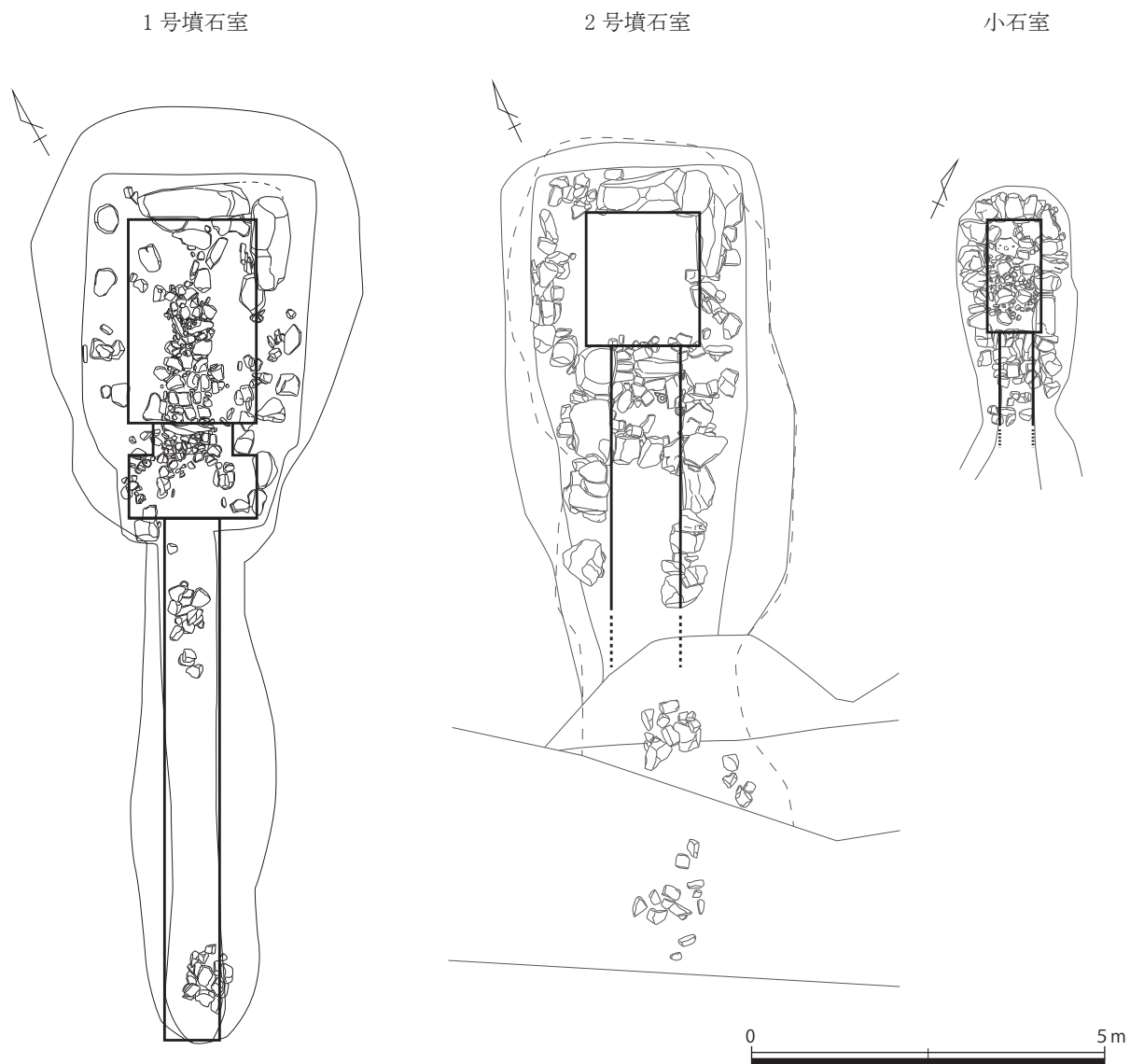
第19図 1～3号墳 (S = 1/500)

### (3) まとめ

今回検出された古墳および石室は1号墳が一番古く、次に2号墳(円墳)と3号墳(円墳)は切り合いが不明瞭であるが同時期、最後に小石室が造営されたと考えられる。1号墳に関しては、調査Ⅲ区トレンチ8の断面(第6図)の28.5m付近に地山を切り込むような落ち込みが確認される事、調査Ⅲ区の等高線が緩やかに北に延びる点(第2図・第3図・第19図写真)から、前方後円墳の可能性もあったが、前方部に当たると思われる開発を受けていない地点について宅地造成の開発申請があり、令和3年3月4日に試掘を行った結果、盛土層や地山を掘り込んで整形したような痕跡は認められない事、遺物の出土も無い事から、現時点では1号墳の北部・北東部は今回の調査範囲外であり未調査であるが、1号墳も円墳である可能性が高い。

出土遺物に関しては、須恵器が8割・土師器が2割程であるが、遺物10(第9図・遺物写真2)は、形状が半島系の土器に類似する陶質土器の甕である。胎土は半島系の土器の胎土とは異なる白色の細砂粒を少量含む黄灰色土(2.5YR6/1)である事から、半島系の土器を模して造られたか、あるいは渡来系の工人によって作られた可能性がある。福岡市内の近隣の遺跡から類似する陶質土器の出土は、調べうる限り確認する事は出来なかったが、春日市大字春日惣利(牛頸川西方250mに位置し、南北に伸びる小丘陵の東斜面)に立地する古墳時代後期の遺跡である惣利西遺跡2号住居から出土した甕との類似が認められた。報告書「春日地区遺跡群Ⅲ 春日市文化財調査報告書第15集」には、口径11.2cm、器高19.0cm、胴部径18.4cmの須恵器として報告されているが、遺物観察表には焼成はやや軟質で色調は灰色、胴部に3条の沈線が巡るとある事(実物を観て確かめたわけではないが)から、当遺跡出土の陶質土器と類似する。形状が半島系の土器に類似する点、惣利西遺跡との距離などから、当時の流通域、交流域などを考える上で興味深い出土品となった。

今回の古墳の検出により、周辺には当古墳を造営した人々の集落があると考えられるが、近隣に集落跡を伴う遺跡の分布がなく、今後の古墳時代における当遺跡周辺の景観を考える上で重要な調査となった。



第20図 1～2号墳石室・小石室 (S = 1/100)



1号墳石室 南西から



2号墳石室 南西から



小石室 南東から



(1) 調査Ⅰ区全景 北西から



(2) 調査Ⅱ区全景 西から



(3) 1号墳石室 北東から



(4) 2号墳石室 北東から

遺構写真 3



(5) 小石室 北西から



(6) 1号墳墓道 南西から



(7) 3号墳 東から



(8) 調査区全景 (Ⅲ区) 北西から



(9) 2号墳羨道2 遺物出土状況 南西から



(10) 1号墳盗掘坑 北西から



(11) 推定4号墳 北から





(1) 1号墳流土 出土遺物



(2) 1号墳墓道 出土遺物



(3) 2号墳周溝・羨道・前庭部 出土遺物



(4) 小石室 出土遺物



(5) 遺物 5



(6) 遺物 6



(7) 遺物 10



(8) 遺物 13



(9) 遺物 15



(10) 遺物 21



(11) 遺物 26



(12) 遺物 27



(13) 遺物 28



(14) 遺物 31



(15) 遺物 44



(16) 遺物 45



(17) 遺物 46



(18) 遺物 47



(19) 遺物 56



(20) 遺物 65

# 報告書抄録

ふりがな	たかふしいせき 1							
書名	高節遺跡 1							
副書名	高節遺跡第 2 次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 1 4 1 0 集							
編著者名	中園将祥							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1							
発行年月日	2021 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかふしいせき 高節遺跡	ふくおかしひがしくしもぼる 福岡市東区下原 4 丁目 907 番 6	40131	2741	33° 40' 27"	130° 26' 58"	20190422 ～ 20190910	549	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
高節遺跡	古墳	古墳時代		古墳		須恵器 土師器 陶質土器 鉄製品		古墳 3 基を検出
要 約	東に立花山を望む福岡平野の北東に位置し、標高 30m 前後の丘陵部の尾根に立地する本調査地点では、古墳 3 基と石室 3 基を検出した。時期は 6 世紀末から 7 世紀初頭にかけてである。今回の古墳の検出により、周辺には古墳を造営した人々の集落跡があると考えられるが、近隣には集落跡を伴う遺跡の分布がなく、今後の古墳時代における当遺跡周辺の景観を考える上で重要な調査となった。							

## 高節遺跡 1

— 高節遺跡第 2 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1 4 1 0 集

2021 年（令和 3 年）3 月 25 日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神 1-8-1

印刷 高松印刷有限会社  
福岡市東区松島 1-4-10



